

# ボノボ（ビーリア）保護支援会 ニュースレター

2017年3月

## ごあいさつ

ビーリア（ボノボ）保護支援会代表 古市剛史

まずはじめに、このニュースレターをお送りするのが3年ぶりになってしまいましたことを、心よりお詫びいたします。

この3年間、私たちが研究と保護の活動を続けるワンバではいろいろなことがありました。まず2014年には西アフリカを中心にエボラ出血熱の大流行がありました。ちょうどこの時期にワンバから300キロほど離れたところでも別の小規模な流行が起きました。9月には大事をとってワンバからも全員引き上げることになりましたが、その後2ヶ月ほどしてこの地域での流行が収まったため、11月には4名の研究者がワンバに戻りました。次のトラブルは昨2016年12月でした。12月19日に最終となる2期目の任期が切れる現カビラ大統領が次期大統領選挙を行わなかったため、抗議行動などによるトラブルを避けるため日本人は一旦コンゴ民主共和国から出るようにとの勧告が大使館からあり、11月末にすべての研究者が帰国しました。ただ幸い、大きな治安悪化にはつながらなかったため、2月はじめに3名の研究者がまたワンバに戻っています。

コンゴ民主共和国にしか生息しないボノボは、一国の政治情勢に大きな影響を受けます。思い返せばそもそも私たちがビーリア保護支援会を立ち上げて保護活動に乗り出したのも、1996年にはじまった戦争で6年間もワンバに入れなかった時期に、保護のために何かできないかと考えて、首都キンシャサで動物園に放置されていたり密猟者によって売りに出されたりしていたボノボを集めて助けるクロードンさんの活動を支援しはじめたのがきっかけでした。

ご報告がおろそかになっていたこの3年間も、病院の建設と医薬品の提供、地元の子どもたちへの奨学金の支給、地域の道路や橋の整備、保護区内の違法伐採や密猟の監視など、皆さんからいただいたご寄付でさまざまな保護活動を続けてまいりました。また、TBSラジオのグレートエイプス保護基金をはじめ、多くの皆様から継続してご寄付をいただきました。さらに今年は、The Bonobo Project というアメリカのNGOが愛にちなんで2月14日をWorld Bonobo Dayにしようという運動をはじめてクラウドファンディングで寄付金を募り、集まったお金を私たちの活動に寄付していただきました。



皆さんのおかげで、戦争で大きく減少したワンバを中心とする地域のボノボの頭数は順調に回復してきています。ただその一方、戦争中に「ボノボを食べない」という伝統的な食物タブーが忘れ去られてしまった地域では、それまでいたボノボが大幅に減少したりまったくいなくなってしまうところもあります。これからは、保護活動の網がかかっていない地域のボノボをどう守るかが大きな課題となってきそうです。

皆様のご支援に感謝して、昨年作成しましたボノボの絵はがきをお送りいたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

# 2015年夏、リーマの季節と村の子供たち

坂巻哲也

ビーリア(ボノボ)の野外研究のスタートは、コンゴ動乱が治まってきた1970年代初頭にさかのぼります。日本人によるビーリア研究は世界でもその先陣を切り、加納隆至先生による広域調査の翌年、1974年にワンバの本格的な調査が始まりました。そして現在も、京都大学の大学院生をはじめ、新しい研究者が毎年のようにワンバで研究のキャリアを始めています。ワンバ調査40周年となった2014年には、HOGARAKA 奨学金で学業を修めたワンバ出身のジャック=バトゥアフェさんが、ルオー保護区を管理する生態森林研究所に就職し、ワンバにあるオフィスの所長に着任しました。隣接するイヨンジ保護区では、キンシャサ大学との共同研究を始めました。私たちが地元の人と続けている長期研究は、ビーリアの保全に役立ちます。人口動態など長期データの蓄積は具体的な保全計画に不可欠ですし、研究者が常駐していることで密猟などが抑制される側面があります。

私は2015年、7月末にワンバに入りました。ビーリアの観察条件がもっともよいこの時期に入るのは、なんと6年ぶりでした。大学の夏休みと重なるこの時期は、多くの研究者がワンバでの調査を希望します。私は調査基地の運営のためもある、研究者が少ない他の時期にワンバに入ることが多かったのです。

この時期を地元ではリーマの季節と呼びます。森を歩くといたるところで、樹上からカサカサと黒く小さいものが降ってきます。葉を食べるガやチョウの幼虫の糞が降ってくるのです。食用のイモムシはビンジョーと呼ばれ、村人の貴重なタンパク源です。リーマとはビンジョーが豊富に採れる季節のことなのです。ビンジョーは乾燥させると日持ちがし、濃厚なうま味はくせになります。地元の学校が休みになる時期でもあり、森には多くの女性や子供が入り出します。閑散となる村と対照的に、森の中はにぎやかです。村の家とは別に



森でビンジョーを集めた子どもたち

に森の中に小屋を持っている人は多いのですが、この時期は森の家はどこも火が焚かれ、女性や子供も森の家に寝泊まりし、ビンジョーや森の野菜を採集したり、川で小魚を捕ったりします。男の子たちは、年少と年長の子が一緒になって森を徘徊し、小鳥や小動物を見つけては捕まえたりします。伝統的な罠の仕掛け方を初めて覚えるのもこんな時です。きっと夜にはヨタカやガラゴの声を聞きながら、親が森の体験や言い伝えを話して聞かせたりするのでしょうか。

ビーリアの大好物でバトフェと呼ばれる果実がなるのも、この時期です。つる性の植物で、果実は樹の高いところになります。酸味のある果実ですが、甘いバトフェは本当に甘く、村人にも人気で、子供たちはバトフェ欲しさに樹に登ります。体の軽い子供は、身軽に樹に登ってみせます。まさしくビーリアとの食物競合です。そんな時期なので、子供たちはしょっちゅうビーリアと出会います。あるときビーリアの大きな集団が、森の中の家の近くを通ることがありました。子供たちは、ビーリアの声を聞いては真似して大声をあげ、小さいポリタンクを太鼓代わりに叩いて歌い、そしてまるでそれに応えるかのようにビーリアたちも興奮して大声を張り上げ、我々の方を眺めながら森の縁の樹上を過ぎていくのでした。



バトフェの実

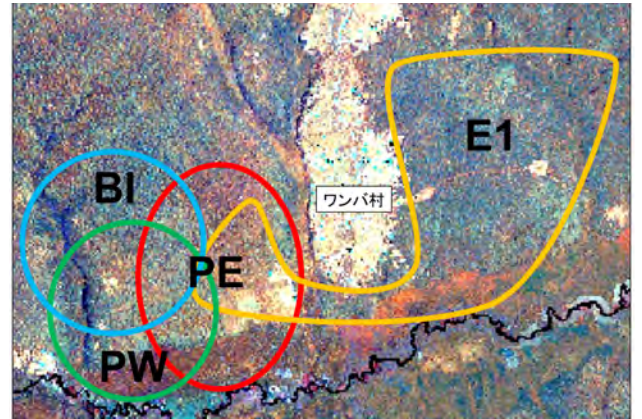
まさに村人とボノボが同所的に暮らすワンバの森。もちろんゾウやボンゴはワンバの森からいなくなって久しいですし、伝統的な集団狩はほとんど行われなくなりました。そのような時代の変容はあるものの、それでも今も、森の知識や経験が世代を越えて引き継がれる様子を垣間見ることができ、あらためて感動を覚えた今回のワンバ滞在でした。

# ボノボ達の「ご近所付き合い」から学べること

徳山奈帆子

ワンバでは、E1 集団と PE 集団という 2 つのボノボの集団を毎日追跡しています。私は 2012 年から、西側を遊動する PE 集団の観察を行っています。PE 集団はオトナメス 9 頭、オトナオス 5 頭を含む 25 頭程度の集団です。観察を続けるうちに、PE 集団のさらに西側に 2 つの集団、PW 集団と BI 集団があることが分かってきました。PE 集団の遊動域は、東側の E1、西側の PW、BI 集団とかなりの部分が重なり合っていたのです。

ボノボと近縁のチンパンジーでは、集団同士に強い敵対関係があります。オスたちは遊動域の境界付近をパトロールし、違う集団の個体とめぐり合うと、相手を殺害してしまうこともあります。これはメスや食べものを巡っての、生態的に意義がある行動であると言われています。チンパンジーのみならず群居性動物一般において、集団間は敵対的な関係を持っています。「集団を作る」こと自体が、限られた資源を共同で防衛するための行動だからです。しかしボノボは集団同士が会っても、一緒に採食をしたり、毛づくろいをし合ったり、遊んだり、平和的に過ごすことが知られています。



ワンバ村の周りのボノボ集団

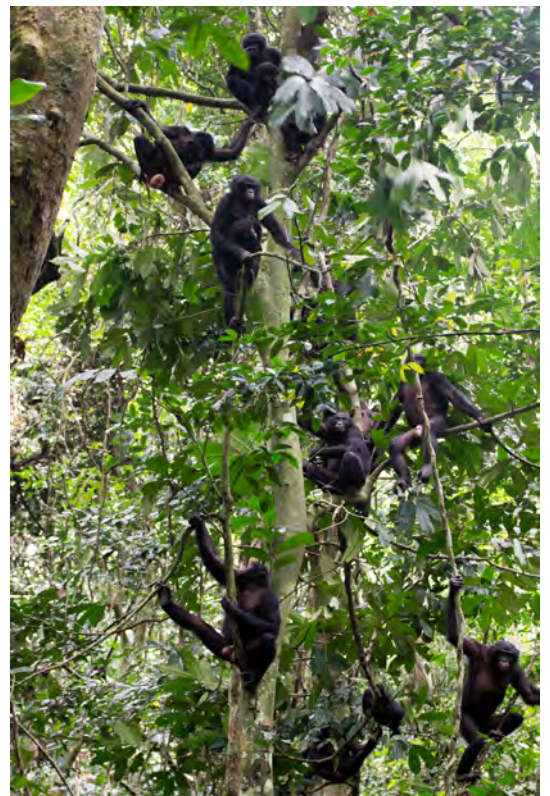


PE 集団のメスに毛づくろいされる BI 集団のメス

私は 2012 年から 15 年まで PE 集団を 2008 時間観察しました。その間、PE 集団は E1 集団と 99 時間、BI 集団と 132 時間、PW 集団とは 387 時間もの間、一緒に過ごしていました。おそらく音声で他の集団の存在を知るのでしょう、出会う前は一気に相手のいる方向へ向かいます。出会うと、最初の 20 分程度は大騒ぎです。あちこちでオスがディスプレイし合い、メス達も声の限りに叫び続けます。観察をする私たちも大混乱で、とにかく誰がいるか、何が起こったか必死で記録します。興奮がだんだん落ち着いてくると、ボノボたちは採食や毛づくろいを始めます。こうなると、しっかりと個体識別ができていなければ集団が出会っていることなど分からなくなってしまいます。そこにいるのは一つの大きな集団のように見えるのです。

非常に印象的な出来事がありました。2014 年 8 月 25 日、PE、E1、PW、BI の 4 集団、85 頭ものボノボが、一か所に集まったのです。どちらを向いてもボノボだらけでした。

いかに温和な彼らとはいえ、4 集団も出会えば何か事件が起こるのではと、私たちは緊張して観察していました。いきなり「ワンッワンッ！」という警戒音が聞こえ、続いて全体が金切り声を上げる大騒ぎが起こりました。何が起こったかと駆けつけると、ボノボ達は村人の仕掛けた罠にかかったピーターズダイカー（中型の草食哺乳類）の周りに集まっていた。ボノボたちは、もはや集団が出会っていることなどどうでもよくなってしまったかのように、ダイカーに夢中でした。まだ生きているダイカーに近づいて恐る恐る触ってみては、「動いた！！」とビックリして木に駆け上っていきます。結局、3 時間もの間ダイカーを観察し続けたあと、4 集団は分かれてその日の寝場所へ向かいました。彼らにとっては他の集団の出会いより、めったに見ない動物との出会いの



ピーターズダイカーの近くの樹上に集まるボノボ達



ワンバで研究する学生たち。それぞれ出身は左から韓国、日本（著者）、カナダ、コンゴ民主共和国

ほうが「大事件」だったようです。

人間は時に、他の集団 / 宗教 / 民族に対して非常に攻撃的に振る舞ってしまうことがあります。しかし、私たちはそれらの壁を越えて友好関係を作ることができます。例えばワンバ基地には、日本、コンゴ民主共和国、フランス、韓国、カナダ、ハンガリー、チリと世界中からの研究者が集まります。このような集団を越えた友好関係は、人間とボノボだけが築くことができます。どのようにボノボ達の平和的な集団関係が出来上がってきたのか。それを知ることで、私たち人間が平和的集団間関係を築く手がかりが得られるのではないのでしょうか。もっともっと、彼らから学んでいきたいと思います。



## 活動報告

ビーリア（ボノボ）保護支援会の活動の2本柱であるボノボの楽園（Lola ya Bonobo）への支援とワンバ村での野生ボノボの保護活動について、ご報告いたします。

ボノボの楽園は、首都キンシャサにある孤児の収容施設ですが、ここで収容しきれなくなったボノボを野生に帰す試みが続いています。場所はコンゴ民主共和国東部の町バサンクスからコンゴ川の支流をさかのぼったところにあるボノボの土地（Ekolo ya Bonobo）と名付けられた森の一角。昔は野生のボノボが生息していたところですが、伐採や密猟の影響で、今は極端に数が減っている地域です。ここにボノボの楽園で育ったボノボを放そうという計画です (<http://www.lolayabonobo.org/ekolo-ya-bonobo/>)。

1回目の初期の導入は成功しましたが、それに続く追加個体の導入では、ボノボにストレスが高まっていたためか、導入に携わっていた係員が襲われてけがをするという事件もありました。現在、第2グループを導入する計画が進められていますが、前回の反省もあり、ボノボの楽園で安定したグループを形成させ、導入場所もすでに導入しているグループの遊動域と適切な距離を保つなど、慎重な検討がなされています。私たちも、野生のボノボの行動や生態の研究者として、専門的な見地から、導入グループの構成や導入地域の選定にさまざまなアドバイスをしています。また、皆さんからお寄せいただいた寄付金から、今年も3,000ドルを活動資金としてお送りすることができました。

ワンバでの活動は、主として公共事業の支援、病院の支援、学校の支援、奨学金の給付を行っています。密猟・密伐などの違法行為の取り締まりは、コンゴ政府の生態森林研究所の職員が行っているため、私たちは、住民の生活と教育を支援することで、ボノボの保護への関心が高まるような活動を進めています。

公共事業の支援では、毎年地元のジョル県とルオー郡に2,200ドルの資金を提供し、生活道路の整備や橋の修理などをサポートしています。また、この資金が適切に使われるよう、経過観察や助言なども行っています。病院については、昨年出産施設と入院施設の増築が完成しました。この病院は、地域の中心的な医療施設として活用されています。ただ、診察料や薬代が払えない村人も多く、病院の自立性を損なわない範囲で医薬品の追加などの支援も行っています。

地域の小学校と中高等学校には、黒板用のペンキやチョーク、文房具などを寄付しています。また奨学金については、ワンバ村とその周辺地域の子供たちを対象に、現在大学生7人、中高等学校生15人を支援しています。大学を最後まで卒業できない学生も多いのですが、この奨学金で大学を卒業した男性が、現在生体森林研究所のワンバ事務所の所長を務めるなど、すこしずつ成果も上がってき



病院の増築工事の様子



増築中の病院（右側が増築部）

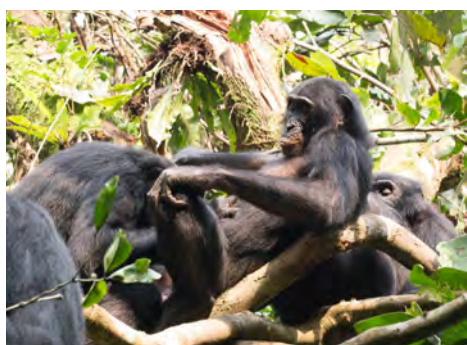
ています。

ボノボと人が同じ家族からわかれた兄弟だという伝説に基づき、ボノボを食べたり殺したりすることがタブーとなっているこの地域ですが、最近の研究によると、主としてコンゴの戦争中にそのタブーが破られ、ボノボを食べるようになった地域があることがわかってきました。幸いワンバ村ではまだそのような伝統の変化は起こっていませんが、ボノボを守ることが自分たちの生活の向上に結びつかない地域では、なぜボノボを守らなくてはならないのかを説明することすら容易ではありません。気づいたら保護区や調査地以外にはボノボがいなくなっていたなどということにならぬよう、これからの保護活動のあり方を考えて行かなくてはならないと感じています。

日本国内では、毎年11月に開催される「アジア・アフリカに生きる大型類人猿を支援する集い（SAGAシンポジウム）」に参加して、私たちの活動を紹介し、絵はがきなどを販売して活動資金を得るためのブースを開いています (<http://www.saga-jp.org/>)。今年は11月4日～5日に愛知県犬山市の日本モンキーセンターで開催されますので、お近くの方はぜひ覗いてみてください。



SAGAシンポジウムでのブース



～ボノボニュース～

## ボノボも老眼になる

私たちの研究グループ（リュ他）がボノボにも老眼があることを発見しました。2016年11月8日に米国の学術誌「Current Biology」で発表され、国内外で広く報道されました。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research\\_results/2016/161108\\_1.html](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research_results/2016/161108_1.html)



## 寄付のお願い

ボノボの保護にご協力いただける方に寄付をお願いします。寄付金は、ボノボ孤児施設の支援および野生のボノボの保護に使われます。ただし、使い道のご希望があれば、孤児施設の支援、野生ボノボの保護などと通信欄にお書き添えください。

振込先 郵便振替 00820-7-128368

ビーリア（ボノボ）保護支援会

ゆうちょ銀行 ○八九店（ゼロハチキュウ店） 当座 0128368

なお、ニューズレターをメールでお受け取りになりたい方は、振り込み書の通信欄にメールアドレスをご記入ください。

連絡先

〒484-8506 愛知県犬山市官林 京都大学霊長類研究所

ビーリア（ボノボ）保護支援会

Fax：(0568) 63-0565

E-mail: [bonobo@mbd.nifty.com](mailto:bonobo@mbd.nifty.com)

ホームページ：<http://bonobo.eco.coocan.jp/>